

毛皮交易史の研究(1)

——毛皮の世界フロンティアと人種奴隷制度——

下 山 晃

はじめに

第Ⅰ章 中世「国際商業」の展開と毛皮交易

- 1 ヴァイキング
- 2 ロシア商人の起源
- 3 ハンザ同盟の抬頭
- 4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇（以上、本号）

第Ⅱ章 ユーラシア毛皮交易圏

- 1 ヨーロッパ＝イスラム商業圏
- 2 モンゴル帝国と毛皮取引
- 3 モスクワ商人とヨーロッパ市場

第Ⅲ章 植民期アメリカの毛皮交易

- 1 白いインディアン
- 2 ハドソン湾会社の創設
- 3 セント・ローレンス商業帝国
- 4 ニューイングランド連合
- 5 製帽工業と重商主義
- 6 人種奴隷制プランテーションと毛皮

第Ⅳ章 毛皮の世界フロンティア

- 1 コサックの東漸
- 2 アリュースシヤンの受難
- 3 ノア・ウェスターズ
- 4 アスターズ・トラストと広東貿易
- 5 アメリカ西部の毛皮フロンティア

第Ⅴ章 極東の開国と毛皮

- 世界フロンティアへの三つの通路
- 1 中露陸路貿易ルート
 - 2 夷館取引の展開
 - 3 日本の開国・文明開化と毛皮

おわりに

—— 掠奪のシステムの帰結

はじめに

『世界探検史』や『〇〇の冒険』と題したような著作は、特に若い心を^{たか}昂ぶらせる傾向を持っている。前人未踏のフロンティアをめざし、未知の世界に果敢に挑戦する気概や探求心は、人間の創造的活動の本質と深く係わっているからである。

しかし、歴史的には、数かずの探検・冒険事業は残忍な征服活動や貪欲なまでの経済活動と表裏一体であることが多く、毛皮資源の開拓を目指した毛皮フロンティアの歴史においても、世界中あらゆる地域で、高価な毛皮資源の exploit (開発) は、毛皮獣棲息地の先住民からの徹底した exploit (搾取) を伴った。探検事業が営利的企業や時の権力者の強力な後ろだてを通じて行なわれた場合、とりわけ先住民の受難は広範かつ深刻なものとなり、特に16世紀以降には「人種奴隷制の展開」と言うべき苛酷な試練が世界各地の弱小先住民の身にふりかかった。北欧でもシベリアでも、そしてアラスカをはじめ北米各地のフロンティアでも、この悲惨な体制は毛皮の取引と結びついて歴史化された。驚くべきことに、世界中どの地域においても、毛皮の取引は奴隷制・貢納制という忌まわしい社会制度と、大きな係わりを持った。

しかし、それは、そもそもなぜなのだろうか？ 遠く離れたロシアの毛皮フロンティアとアメリカのフロンティアとが、後に本稿で見るようにほとんど同等と言って良いような開拓の歴史を持った背景には、一体、どのような歴史的メカニズムが働いていたのだろうか――？

この疑問に対しては、ひとまず I・ウォーラーステインの提唱した「世界システム論」を手がかりに、ヨーロッパを一個の有機的な経済システムの「中核 core」ないしは商取引の「中枢 emporium」として考え、その「中核」「中枢」を軸に「換金商品獲得のための強制労働が組織された」と見ることで、ある程度納得のゆく解答が得られる。世界史のあゆみを有機的な連関を持った一個のシステムの展開として捉える視点に立つなら、例えばシベリアやアメリカ大陸の先住民、それにカムチャッカからアリューシャン列島に至る北太平洋地域一

帯の先住少数民族が、共にことごとく奴隷化され駆逐された理由を、単に一国ないしは一定地域の範囲で分析するような狭い見方は採れなくなる。特に本稿のようにひとつの世界商品の歴史を追うことを課題とする論稿では、木ではなく森を見る視点が何よりも必要となり、世界各地に展開した探検・征服事業は、単に偶然から同じような性格を持ったのではなく、相互に密接な社会経済的関連を持つ一個の「世界システム」が成立したからこそ、同等なフロンティア開拓の歴史として展開したと考える必要が生まれてくる。一個の「システム」の中で「中枢」が従属変数としての「辺境」を創り出してきたのであり、つまりは、探検・征服は「システム」を具体的に運営・機能させる中枢の側から辺境に向けての侵食活動として推進され、そのことによってユーラシア北片の人びとも新大陸の極北の民も、毛皮の「世界フロンティア」の重層的な支配体制の最下層に組み込まれて、まさに「辺境」の民として共に *exploitation* の対象となりつづけたのだとすることができる。このことに鑑みるならば、特に16世紀以後の毛皮交易史の解明に当たっては、ひとまずはウォーラーステインの歴史理論が直接妥当な分析視座として当てはまるとみて大過はない。毛皮史展開の大筋は、「世界システム論」で十分整合的に理解できるのである。

その意味で、ウォーラーステインがハンザ同盟の毛皮取引活動に係わって「国際的債務奴隷制」の存在を指摘したことは、示唆的である。事実、毛皮は後に本稿で論及するように、世界中至るところで「中枢」部における莫大な富と「辺境」部における苛烈な搾取制度とを同時に生みだし、時代に大きな影響を与えつづけたからである。⁽¹⁾

- (1) I・ウォーラーステイン『近代世界システム：農業資本主義とヨーロッパ世界経済の成立』（川北稔訳、岩波書店、1981）特に156—157頁。同『資本主義世界経済Ⅰ、Ⅱ』（藤瀬浩司ほか訳、名古屋大学出版会、1987）。本稿における「世界システム論」の評価は、主に龍谷大学社会科学研究所における4年間にわたる共同研究を前提としている。池本幸三編『近代世界における労働と移住』（阿吽社、1992）所収の拙稿「植民期アメリカ低南部における Staples とマーチャント・プランターの抬頭」（特に119—121頁）、同書第1章の松岡利道論文「近代世界のジレンマ：世界システム論と生産様式接合論の射程」、布留川正博「資本主義と不自由労働：理論的枠組みのための覚書」（龍谷大学『社会科学研究年報』第19号、1989）。

ただ、ウォーラーステイン自身は、そうした毛皮取引による「国際的債務奴隷制」の存在を指摘していながら、その「国際的債務奴隷制」と同等なシステムがハンザ以後にも20世紀に至るまで拡大しつつ存続したという史実に気づいてはおらず、毛皮史の分析や毛皮取引の歴史的重要性の解明をいつの間にか忘れ去ってしまった感がある。それゆえ、彼が見落としたハンザ以後の「国際的債務奴隷制」の歴史につき、新たに実証と考察とを加えておくことが望まれる。「世界システム論」は包括的・本質的であるだけに、いわば随所に穴のように欠落した部分が多く、「穴埋め」の作業がどうしても必要なのである。本稿はその「穴埋め作業」のために「世界システム論」を手がかりに「毛皮の世界フロンティア」および「人種奴隷制」という独自の分析枠を設定している。そのことと合わせて、世界システムが成立する以前の中世世界の毛皮史の展開にも目を向けておくことで、毛皮という商品の果たした世界史的な意義が浮き彫りにできるばかりでなく、「近代世界システム」が一体どのような歴史的性格を孕んだものであるかが理解しやすくなるだろう。

本稿で展開する「世界フロンティア」の理論は、基本的にはウォーラーステインの近代世界システム論とアメリカ西部開拓史に係わる F・J・ターナーの「フロンティア理論」とから示唆を受けたものである。この二つのダイナミックな歴史理論に加え、民衆史の視覚から E. Wolf の著作が世界史的な観点に立ってシベリアの毛皮の歴史の概略に論及していたことも、筆者には興味深く思われた。H.A. Innis や E.E. Rich の学問的遺産を受け継いで、カナダからは A.J. Ray や D.B. Freeman のように広い視野を持つ若手研究者が現われていることも筆者自身が考えを固めてゆくのに大いに役立った。更に関連文献を渉猟する内、「世界フロンティア」の“概念”は独自の歴史“理論”として彫琢できるものと確信された。あとはまずは資料を整え、着実に実証の持続を重ねることが課題であった。⁽⁸⁾

ところで、本稿では織布に先立つ最古の衣料として原始の時代に登場し、中世においては身分制度の一基準となり、近代においては「恋愛と贅沢と資本主義」を象徴する商品となった毛皮の歴史が、「世界フロンティア」「人種奴隷制」

という二つの基本概念、さらには「掠奪のシステム」という観点から考察される。中世初期以来のノヴゴロドやヴァイキングの武装商人の活動や、それと結びついて「毛皮による国際的な債務奴隷制度」を確立したハンザの抬頭、そしてイスラム圏との交易によるヨーロッパ毛皮市場の開発は、やがてモスクワ商人の興隆へと連なり、その後は、無尽蔵の毛皮資源を求めたシベリア開拓の歴史が導かれる。そして、貢納や十分の一税の対象ともなったその毛皮を求めたモスクワ商人、コサックの活動は、怒濤の勢いで広大なシベリアの原野を東漸し、北海道の北を「かすめ通る」形でベーリング海峡を越えて北米フロンティアの西端にまで連なる。しかもそれは、ロッキー山脈の山間^{やまあい}において、アメリカ大陸の毛皮資源を東から西へと追い求めた動きとも邂逅^{かいどう}する。ヨーロッパ市場を中核に、幾多の先住少数民族を奴隷化しながらシベリアを東へ東へと進む東向きのフロンティア開拓運動と、インディアン社会を根こそぎ破壊しながら北米大陸を西へ西へと驀進^{ばく}する西向きのフロンティア開拓運動とが、地球をひと周りに結ばれる。——毛皮のフロンティアは、「人種奴隷制度」の展開を内包した「世界フロンティア」として、まさに、全世界的な規模の拡がり^{つな}と繋がりを持つ。ある意味において鎖国日本の開国は、通常言われる捕鯨史の展開という以上に、そうした「世界フロンティア」展開の大円団にほかならない。

- (2) E. E. Edwards, compiled, *The Early Writings of Frederick Jackson Turner* (The University of Wisconsin Press, 1933). 『フレデリック・J・ターナー』(渡辺真治・西崎京子訳、研究社、1975). R・A・ビリントン『フロンティアの遺産』(渡辺真治訳、研究社、1971). I・ウォーラスティン『史的システムとしての資本主義』(川北稔訳、岩波書店、1985). E. Wolf, *Europe and the People without History* (University of California Press, 1982). H. A. Innis, *The Fur Trade in Canada ; an Introduction to Canadian Economic History*. (2d revised edition, University of Toronto Press, 1956). E. E. Rich, *History of the Hudson's Bay Company : 1670-1870*. (2 vols., Hudson's Bay Record Society, 1959), Rich, "Russia and the Colonial Fur Trade," (*Economic History Review*, 7, 1955), 307-328. A. J. Ray and D. B. Freeman, 'Give Us Good Measure' ; *An Economic Analysis of Relations between The Indians and the Hudson's Bay Company before 1763*. (University of Toronto Press, 1973).

本稿では、このような毛皮史のあゆみが、主に社会経済史の分野の研究業績を基本として通史的にまとめられ、分析・考察されている。筆者が専門分野としてたずさわってきたのは植民地時代のアメリカ商業史・奴隷制度史の研究であるが、その時期の毛皮交易史の研究を出発点としながらも、毛皮史の意義についての考えを深めてゆくにつれ、上に述べてきたような世界的な展望が是非とも必要と痛感され、本稿を執筆することは筆者自身の研究課題を発展させるためにどうしても必要なことであった。司馬遼太郎『ロシアについて』が示した鋭い歴史意識なども、そうした筆者の思いを、一層強いものに育てた。⁽⁴⁾

なお、狩猟社会の成立以来、中世の末期に至るまで毛皮の着用には防寒という「肉体的な必要」と並んで「精神的・呪術的な必要」があったと考えられること、最古の文明シュメールに起源を持った「カウナケス」という毛皮のモードは、以後5000年間にもわたってスタンダードな基本モードとなって流行を繰り返したこと、古代エジプトの皮革文化は驚異的な発展を遂げていたこと、古代ギリシャ世界では中世以後の社会とは全く逆に、「毛皮は卑しき野蛮人の衣服」とみなす観念が存在していたこと、旧約・新約とも聖書には毛皮服に関する記述が頗る豊富であること、中国では毛皮（特に黒テン皮）の貢納が紀元前二千年紀以来20世紀に至るまで重要な社会的機能を果たしていたことなど、原始・古代の毛皮の歴史を詳しく調べてみると、興味深い話題が幾つでも浮かび上がってくる。紙数の都合上、本稿では記述を中世以後の時代に限らざるを得なかったが、それは筆者が、中世以前の時代において毛皮が重要な歴史的意義を持たなかったと判断したからではない。このことを予め断わっておきたい。⁽⁵⁾

また、ステイタス・シンボルとして中世社会に独特の社会秩序と風俗をもた

(3) 筆者自身、植民地時代および西部開拓時代の北米フロンティアでの毛皮取引については、すでに二つの論稿を発表したことがある。本稿Ⅲ章以下と共に、拙稿「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」（龍谷大学『社会科学研究年報』第20号、1990）58-80。同「毛皮取引とランデヴー：アメリカ西部における毛皮フロンティアの開拓と年市」（『市場史研究』第7号、1990）30-36。を見られたい。

(4) 司馬遼太郎『ロシアについて：北方の原形』（文春文庫、1989）。本書には、「毛皮について」と改題してもよいような内容が含まれている。

らした毛皮の文化や毛皮と文芸（神話・民話・小説など）との係わり、日本文化と毛皮などについても本稿ではほとんど論及を行なってはいない。あくまでも、筆者の専門分野を中心に考察をすすめた社会経済史的な論究として本稿を位置づけたいと願ったからであり、「世界フロンティア」および「人種奴隷制」の理論概念をより明確な形で提示しておきたいと願ったからである。毛皮の文化史的な考察については、他日を期したい。

考察の対象とした時代や地域が多岐にわたるだけに、また類似の先行業績がほとんど皆無に近いと言ってよいだけに、本稿には色いろな思い違いや誤解が含まれているに違いない。「世界フロンティア」という分析枠が理論上多くの問題点を抱えるであろうことも、十分に承知している。しかし、少なくとも本格的な毛皮史・奴隷制度史研究の試論としての役割は担えるはずであり、さしあたっては毛皮の世界史的な位置づけの素描ができたなら、本稿の役目は果たされるのである。色いろな分野の多くの方々からの厳しいご批判やアドバイスを待ちたい。

(5) さしあたり、M・エリアーデ『シャーマニズム』（堀一郎訳、せりか書房、1974）。

J・ベックマン『西洋事物起源』（特許庁内技術史研究会訳、第Ⅲ巻、1982）。『松田壽男著作集』（全6巻、六興出版）。平林章仁『鹿と鳥の文化史：古代日本の儀礼と呪術』（白水社、1992）、などを見られたい。

第Ⅰ章 中世「国際商業」の展開と毛皮交易

1 ヴアイキング

ベルギーが生んだヨーロッパ中世史研究の大家 H・ピレンヌは、古代と中世を画するメルクマールを、それまでの通説が主張したようなゲルマン民族のヨーロッパ侵攻にではなく、8世紀前半以後のイスラム世界の拡大による地中海交易網の破壊・断絶に求めた。⁽¹⁾ いわゆる「文化断絶説」の展開である。その学説に従えば、メロヴィング王朝とカロリング王朝とは顕著な「経済的コントラスト」をなし、また11～12世紀におけるヨーロッパ中世諸都市の勃興は、「商業の復活」と名づけるべき一連の歴史事象と結びついて生起した、ということ

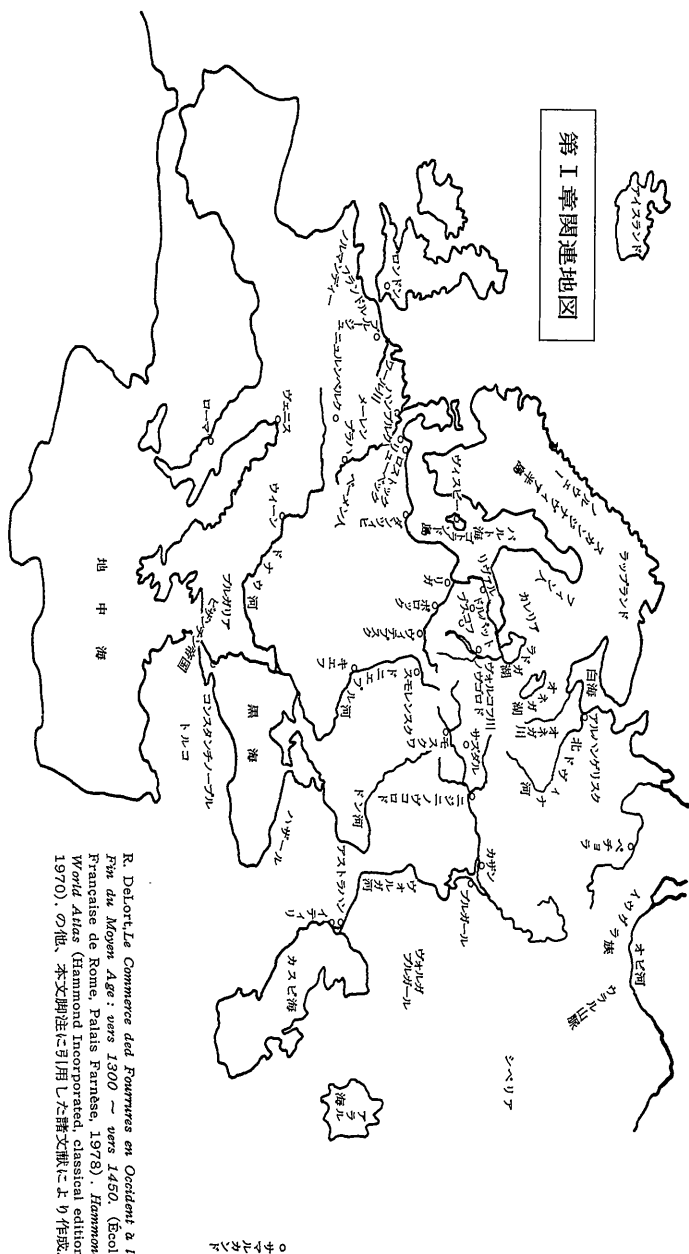
になる。しかし、ピレンヌの言うごとく、本当に商業は「断絶」し、また11～12世紀の時点で「復活」したのであろうか。以下の行論から明らかなように、中世における毛皮交易網の形成と発展を追ってゆくかぎり、上のようなピレンヌの主張には多くの疑問が浮かび上がって来るように思える。もちろん、F・ブローデルも言うように、確かに十字軍の遠征を機縁としてヨーロッパでは〈流行の狂気〉が毛皮の分野にも急速に蔓延^{まんえん}し、「商業の復活」をうかがわせるような史実が存在したことは、事実であろう。十字軍の時代以降、衣食住のあらゆる分野において、顕著な変化はいろいろな国において見ることができるからである。

ところが、「アラブ世界による地中海封鎖」の影響を余りにも過大に重視するピレンヌの理論や、中世商業を都市経済の枠組みの中にのみ閉塞^{そく}させるカー⁽³⁾ル・ビュッヒャーのような見解とは異なり、毛皮交易の分野では「中世国際商業」と形容し得る大規模な取引活動が継続的に展開していたのであり、改めて「復活」を云々するのは必ずしも史実に即した主張とは言えない側面がある。こうした観点にたてば、例えば西洋中世商業の地域差・時代差を十分に配慮した上での次のようなピレンヌ批判⁽⁴⁾は、この「中世国際商業」の存在を直感した見解でもあったということになる。

「……かくて、時代差と地域差とを考慮に入れてカロリング時代を理解せねばならない。西ヨーロッパにおける経済の衰微は、決してすべての地域におけるものではなかった。例えばワール河畔のティールは、ヴァイキングたちによって掠奪されたドルシュタートがカロリング初期において果たした役割を継承し、ドナウ地方にはペーメン、メーレンのスラヴ人との

- (1) H・ピレンヌ『資本主義発達の諸段階』（大塚久雄・中木康夫訳、未来社、1955）。同『ヨーロッパ世界の誕生：マホメットとシャルルマーニュ』（増田四郎監修、創文社、1960）。同『中世都市』（佐々木克巳訳、創文社、1970）。
- (2) F・ブローデル『物質文明・経済・資本主義：日常性の構造1』（村上光彦訳、みすず書房、1985）427。
- (3) K・ビュッヒャー『国民経済の成立』（権田保之助訳、栗田書店、1942）。
- (4) 宮下孝吉『西洋古代中世経済史』（ミネルヴァ書房、1967）253。

第I章 関連地図



R. Delort, *Le Commerce des Fourrures en Occident à la Fin du Moyen Âge : vers 1300 ~ vers 1450*, (École Française de Rome, Palais Farnese, 1978). *Hammond World Atlas* (Hammond Incorporated, classical edition, 1970). の他、本文脚注に引用した諸文献により作成。

交易から遠くロシア商人を吸収した市場があった。」

この引用文に述べられた「ヴァイキングの役割」や「ロシア商人を吸収した市場」の問題を、毛皮交易の部面に係わって具体的に実証することが本章の主要な課題となる。論述の重点は、とりあえず(1)中世世界における毛皮流通は具体的にはどのような範囲にまたがっていたのか、(2)もしそれが中世における〈国際的〉商業の展開として把握できるとしたなら、そうした拡がりを可能にした要因（制度・組織・主体）は何か、という二点に置かれる⁽⁵⁾。そうした課題を解き明かすための手がかりとして、まず、最初に、北洋の「海賊」集団として有名なヴァイキングと毛皮の係わりから考察をはじめよう。

9世紀から11世紀にかけて東はロシア、南は地中海沿岸、そして西はノルマンディーからグリーンランド、更には北米大陸東北端にまで移動した民族があった。「北の民」ノルマン人である。スカンジナビアとデンマークを原住地としたこのノルマン人は、元はゲルマンと同じ起源を持つと言われる半農半漁の民であったが、航海術に長じ、海路よりヨーロッパ各地に侵攻して掠奪の商業や奴隷貿易にも従事した。^{ヴァイキング}「入江の民」という呼称は、こうした海洋活動から生まれたものである。彼らヴァイキングは、毛皮交易のふたつのルートを開拓した。第一は北ノルウェイから東に向かってラップランドに至るルート、第二はバルト海東部より北方ロシア、更には中央ロシアに至るルートであった。

第一の北ノルウェイからのルートは、通称ハログランドと呼ばれた地方を出発拠点とするものであった。ハログランドでは、各地の有力支配層の代表がノルウェイ王より毛皮貢納の統轄権を依託され、ラップ人から *finnskattr* と呼ばれる貢納を徴収する制度が、遅くとも9世紀の後半までに確立されていた⁽⁶⁾。その制度の概要は、例えば880年頃にハログランドからビアルミア（恐らくは白海沿岸地方）に航海を行なった Ohthere なる人物の見聞録が次のように伝えていることから、その一端を窺える。

(5) こうした問題意識が出てくる背景や根拠については、F・レーリヒ『中世の世界経済』（瀬原義生訳、未来社、1969）およびI・ウォーラーステイン『近代世界システムⅠ』（川北稔訳、岩波現代選書、1981）17—97.を参照願いたい。

「ラップ人は皆、15頭の白テンの皮革⁽⁷⁾、クマないしはカワウソのケトル、その他最高級の品々を自らすすんで献納していた」。

Ohthere の時代には、100人ないしはそれ以上の兵士によって編成されたノルウェイ王の軍隊が、冬の間に山野を越えてラップランドに進駐していた。そしてラップ人との間で取引を行うための市場を開設する一方、彼らに毛皮の貢納を強制したのである。春には、貢納や取引を通じて集められたビーヴァーや黒テン、白テン、それにその他色いろな毛皮獣の毛皮がノルウェイにまで運び込まれ、大いに国庫を富ませていた。留意すべきは、すでにこの時代に毛皮を主要な交易品としてヨーロッパ大陸とイギリスとの間に一定規模の定期的な取引が展開されていたことで、北欧産の毛皮はイングランドの小麦やハチミツ、ワイン、織物などと交換された。『エギルス・サガ』、『オルヴァル・オズ・サガ』、それに「王たちのサガ」と通称される『ヘイムスクリングラ』など北欧の神話・伝承は、いずれも、ラップランドやビアルミアでのヴァイキングの活動についてかなり正確に伝えていることが、近年の歴史研究によっても指摘されている。9世紀以後、ヴァイキングたちが近隣部族に貢納を課す形で毛皮取引をかなり広い範囲にわたって支配していたと見て、まず間違いはないだろう。ヴァイキングたちは Ohthere の時代までに、毛皮の交易をめぐって多く

(6) こうした貢納システムは、「貢納的生産様式 tributary mode of production」という学術用語の在ることからもわかるように、実は中世以前の社会経済を理解するに当たって極めて重要な役割を担ったもので、本稿でも後に度々取り上げることになる。「貢納的生産様式」については、S・アミン『不均等発展』（西川潤訳、東洋経済新報社、1983年）、E. R. Wolf, *Europe and the People without History*. (University of California Press, 1982), 79—88. L・S・スタヴリアーノス『新・世界の歴史：環境・男女関係・社会・戦争からみた世界史』（猿谷要監訳、桐原書店、1991）。阿部謹也編『贈り物と宴会』（週刊朝日百科『世界の歴史』54、1989）。などを参照。

(7) 毛皮関係の訳語としては、「Skin=皮革、fur=毛皮、pelt=小動物の生皮、hide=大型動物の獣皮、leather=なめし皮」とするのが適当と考えられるが、本稿では記述の便宜上、fur 以外の用語にも「毛皮」の訳語をあてた。「毛皮」と記した後に原語を書き添えて、例えば「毛皮 skin」とした場合もあるが、煩雑さを避けるために、必ずしも統一的な表記は採用しなかった。

の「悪の民」と敵対していた。例えば、東方からはキルフィングスの民（恐らくはスウェーデン人かロシア人）が押し寄せ、盛んにラップ人との取引（8）に[・]関与していた。また、現スウェーデン領の北部地域に蟠居したツウエンズ（クウェンズ）の民は、事ある毎にラップ人からの掠奪を繰り返し、カレリアの民と始終干戈かんかを交えていた。

『エギルス・サガ』によれば、このツウエンズ人は、ビーヴァー、黒テン、白テンなどラップ人からの掠奪品の一部を貢納として献じる見返りとしてヴァイキング王の加護を受け、カレリアに対抗したという。また他の史料によっても、ラップランドやビアルミアではスウェーデン人の抬頭がめざましく、各地で貢納を取り立てはじめたと伝えられる。ラップ人の真南に住んだフィンランド系ツウエンズ（フィン族）とカレリアとがヴァイキングの第一のライバルであり、それに加えて更に南の地域で毛皮市場を牛耳ったスウェーデン人とロシア人とが第二の強力なライバルであった。時代を経ると共に第二のライバルの勢力が増し、フィン族への支配を強めて彼らを単にラップ人との毛皮取引の仲介者の地位に貶めていった。11世紀の第1四半期には、ヴァイキング王の代理人が数人の商人と共にビアルミアに海路到着したことを記した記録がある。北ドヴィナ川河口ではヴァイキングたちは商館を設置し、土着の民と灰リス、ビーヴァー、黒テンなどの毛皮を獲得したのである。^{（9）}

ハロガランドやラップランドを越えて、もっと内陸のルートもヴァイキングたちの活動の場であった。それはバルト海東部から北方ロシア、更には中央ロシアにまで及ぶルートであった。後に本稿で重大な歴史的意義を強調することになるロシア産毛皮は、このルートの確立と共に歴史の表舞台に登場しはじめる。「ロシア」とひと口に言っても、広大な地域に及んでいるが、ここで特に注目されるのが、次に述べるノヴゴロドの民の毛皮交易である。

- （8） ヴァイキングの勢力圏拡大については、茂在寅男『航海術』（中公新書、1967）、荒正人『ヴァイキング』（中央公論社、1968）、A・クーレウィチ『バイキング遠征史』（中山一郎訳、大陸書房、1971）、J・ブレンステッス『ヴァイキング』（荒川明久・牧野正憲訳、人文書院、1989）、J・シンプソン『ヴァイキングの世界』（早野勝巳訳、東京書籍、1990）。

- (9) 8～18世紀にノルウェー、アイスランドに成立した叙事的頭韻詩が『エッダ』、12～13世紀にアイスランドでまとめられたヴァイキングの豪傑物語が『サガ』である。『エッダ / グレティルのサガ』(松谷健二訳、ちくま文庫、1986)。S・カメンスキイ『サガのころ』(菅原邦城訳、平凡社、1991)。R・プエルトナー『ヴァイキング・サガ』(木村寿夫訳、法政大学出版局、1981)。なお Ohthere については、O. Pritsak, *The Origin of Russia, I, Old Scandinavian Sources Other than Sagas*. (Harvard Ukrainian Research Institute Monograph, 1981), 692—699。ヴァイキングの毛皮交易については H. R. E. Davidson, *The Viking Road to Byzantium*. (1976)。および G. Jones, *A History of the Vikings*. (Oxford University Press, 1968), 23, 161—162。

2 ロシア商人の起源

現ロシア共和国北西部にはノヴゴロド州があり、その州都もやはりノヴゴロドである。この町はロシア最古の町のひとつとして知られ、有名な『年代記』には既に 859 年の記録にその名が見える。ノヴゴロドの民は10世紀の後半までにラドガ湖南方のヴォルコフ河畔に居住し、西方ヨーロッパへのロシア産毛皮の輸出拠点を支配しはじめていた。専門の経済史家でも着目することは少ないようであるが、実はこのノヴゴロドはハンザ同盟のメンバーとなり、当初より強制的な毛皮貢納制をつくり上げていた。このことは、後に本稿で明らかにするように、ロシアの歴史にとっても、ヨーロッパの歴史にとっても、そしてひいては毛皮の「世界フロンティア」の拡張の歴史に関しても、きわめて重要な意義を持った。ロシア毛皮商の勃興は、すなわち近代毛皮取引の胎動に直結する。

それはともかく、ヨーロッパ世界が「中世の暗黒時代」^{ひつそく}に逼塞していたとされる10世紀には、ヴォルガ河方面からロシア商人が黒テンや白テン、リス、キツネ、ビーヴァーなどの毛皮を、ブルガリア近辺にまで盛んに売り込みはめるようになる。私見であるが、この動きは、後に見るイスラム商業圏との取引の昂まりの副産物であったとも思われる。10～11世紀の初頭にまとめられたアイスランドの『サガ』は、「毛皮のビジョーン」とアダ名されたビジョーン(ビュールン)がアイスランドへの移住の前にノヴゴロドと盛んに毛皮を取引した

ことにつき何度かふれている。また、しばしばロシアを旅して聖オラフのために1015年頃にノヴゴロドから高価な毛皮を買い求めていたガスレイクなる人物のことも記されている。こうした記録や、ロシアを訪れていた北欧商人の姿を記した古記録から見て、この時期すでにヴァイキングたちがノヴゴロドの民を通じてロシア産の毛皮を相当な規模で取引していたことは明らかだとされている。北欧・ロシアのような極寒地の毛皮は、色合いが明るく、毛も密に詰まっているために超一級品が多かった。しかもこれらの地域は、夏場や温暖な地方で猟れる毛皮以上に大きなサイズの柔らかい毛皮を提供した。ウラル以西のヨーロッパ・ロシアでは、当初はリスが最も豊富な毛皮資源であった。北欧からの毛皮と並んで、どの時代にもロシア産のリス皮はヨーロッパにおいて非常に高い評価を得ていた。最高級の毛皮は、後にシベリア開拓の最も重要な誘因となる黒テンをはじめとして、かつて北欧～ロシア一帯に無数に棲息したイタチ科の獣から得られたが、特等級の黒ギツネなどもいくらかでも捕獲できた。カワウソやビーヴァーはロシアの大地を縦横に区切るように流れる大小河川の至る処に見られ、他にも良質で大量の毛皮が、無尽蔵とも思えるほど豊富に眠っていた。人影はまばらで、動物たちは未だ種としての脅威を抱くことはなかった。

ところで中世ロシアでは、毛皮獣を捕獲し販売する者には概ね四種の範疇があったと言われる。第一はワナを仕掛け、直接毛皮獣の捕獲にあたる者、いわゆる猟師 trappers である。第二は東ヨーロッパの主要な毛皮市場に皮革類 skins を持ち込む者、第三はサマルカンドよりロンドンに至るまでの各地の取引所に毛皮を運ぶ者、そして第四がヨーロッパ・ロシア以外のウラル、ないしはカスピ海方面の地方市場で毛皮製品を縫い、販売する者である。第一のタイプの猟師は、スラヴ、バルト、フィン、そしてトルコの民など農耕に適したヨーロッパ・ロシアの中央部に暮らす農耕民と、農業のできない北方ロシアに住むラップ人とに大別される。「猟師」と言うと、何か牧歌的な素朴な生活者のイメージがあるが、実際には大抵は南方（あるいは西方）から侵攻した領主勢力によって強制的に毛皮獣の捕獲に従事させられた人びとのことである。中央

ロシア並びに北ロシアの各地の土着語では、「取引」を意味する単語はすなわち「毛皮の捕獲」を意味するとされており、この強制捕獲が昔から如何に重要であったかが窺える。強制捕獲の習慣はやがてトルコ・モンゴル系の言葉で「貢納 yasak, isak」と総称されることになり、勢力を持った領主層は、この貢納制度を組織的に統制していった。ちなみに、この制度は後にシベリア開拓でもきわめて重要な役割を果たし、ヴォルガ流域には15～16世紀、シベリアには17世紀以後大々的に導入された。ヴォルガ地方では1720年代以降、シベリアでは概ね1822年以降、金納化され、少数民族支配の経済的骨格となったが、これは実にロシア革命の時代まで、広大なロシア帝国の隅々で維持されたと伝えられる。貢納制度の厳格な実施は世界中至る処で奴隷制の創出にも結びついた⁽¹⁾が、本稿では、この忌まわしき「貢納」システムについて、後にまた第IV章の2において詳しく論じることにする。

第二のタイプの者は、貢納品や税の取立人、商人、および「掠奪者」から構成されていた。「掠奪者」と言うのは、東欧の市場に運び込む毛皮を得るために、中央ロシアの人里離れた小村や、北方ロシアの人跡まばらな地域を荒らし回った連中のことである。大抵は、それはヨーロッパ・ロシアの諸国を根城にした「群盗」で、キエフ周辺のロシア人とその子孫が最も多く、また際立った活動で名を知られたのはノブゴロド人であった。その他、スウェーデン人やラップ人を支配していたノルウェイ人も多数含まれていた。13世紀ともなると、ノルウェイはラップランドに対する王家の独占を放棄したが、時折ノブゴロドなどと交戦し、その勢力をそれなりに誇示していた。従って、ノルウェイ人が余勢を保った地域では、ノブゴロドはラップ人からの貢納を思うように取り立てることはできなかった。スウェーデン人の内の有力部族はカレリア地方に君臨し、ノヴァ河沿いにラドガ湖からフィンランド湾に至る水系を支配しようともしていた。

ノブゴロドは、スウェーデン、ノルウェイなど北方諸民族の侵攻とモンゴル

- (1) O. Patterson, *Slavery and Social Death, A Comparative Study*. (Harvard University Press, 1982), 122—124.

諸民族による領土蚕食の動きに対抗し、長年にわたって覇権争奪の争いを繰り返して徐々に独自の地歩を固めていった。ノブゴロドの繁栄は、ハンザ同盟に加盟したドイツ商人などに毛皮取引を仲介することで、より一層確たるものとなった。なお、ヴォルガ河の中・下流域を支配したのはトルコ・モンゴル系の諸民族で、ヴォルガ・ブルガール、ハザール、カザーンと呼ばれた者たちであった。「掠奪者」のリーダーたちは、名高いロシアの毛皮を求めて東欧の大市場に集まる世界各地の商人たちとの取引を統制しようと、戦争と権謀術数を重ねた。中部から北部ロシアの極寒の地にまではるばると遠征をくり返し、支配領域を拡大して土着の人びとを貢納制の枠の中に押し込め続けたのは、これら支配者たちが土着民に毛皮を捨て値同然で供出させて市場での毛皮の供給を確固たるものにしようとする目論みだからにはかならない。ヴォルガ上流域の農民たちを納税予備軍として確保し、また北方ロシアの住民を外来商人との直接取引から隔離して単なる貢納隷属民に留めおくために、しばしば苛酷な弾圧策も講じられた。

ロシア毛皮の取引に係わる者の第三のタイプは、東欧各地の市場から諸外国に向けてロシア産の毛皮を「輸出」した、外国系商人を中核とした人びとである。これら外来商人は、かなり組織立った集団を組んでロシアに入り、かねてより勢力の拡張をはかっていた地方豪族からの保護を受けた。エビス（異邦人）は、中世においては表立った大々的な活動を示さないものの、商業の隆盛と結びついて非常に重要な画期をもたらすことがある。これは、洋の東西を問わず中世社会の顕著な一特徴と思える。毛皮業者の第四のタイプについては、こうした特徴と絡めて、後に「ヨーロッパ・イスラム商業圏」の項目において別個に論じる予定である。次項で論じるハンザ同盟の抬頭も、こうした特徴に関連した歴史的文脈の中で把握したい。ただし、ハンザについて論じる前には、どうしてもノブゴロドによる毛皮取引の歴史に、さらに目を向けておく必要がある。ノブゴロドが特に問題になるということは、上に類別した第二のタイプの者、「貢納・租税取立人、商人、および掠奪者」が中世毛皮取引史上きわめて大きな意義を持ったことを意味すると同時に、中世における東ヨーロッパ市場

の独自の展開の重要性を意味している。中世史に論及する者にとって、本稿冒頭に述べたピレンヌ理論への再吟味が必要となるのは、まさにこの東欧市場の重要性が、中世の「国際商業」の中核をなすからでもある。

9世紀前半の内に、スウェーデン方面のヴァイキングたちは「ガルダリク」と呼ばれる城塞を各地に築き、北方ロシアにまで進出、「ルーシ」と呼ばれて権勢を誇った。彼らはリューリック〔?～879年〕に率いられて、ロシア〔ルーシ〕の地に、最初の国家ノブゴロド公国を打ち建てた。10世紀になり、ドニエプル、ヴォルガ両大河の交易権を支配下に収めてからは、ノブゴロドは「ルーシ商業路」と通称された国際的商業ルートを牛耳った。このルートの支配によって、彼らは古代以来絶えず重要な奴隷供給源となっていたスラヴ諸民族との交易を支配し、また毛皮取引においてヴァイキングが西で果たした役割を東において果たすことになった。「スラヴ人」を意味する中世ラテン語 *sclavus* がヨーロッパ各国語の「奴隷」という単語に通じ、また先に述べたように「取引」の総称が「毛皮取引」という単語から派生したという史実は、毛皮取引が中世において奴隷取引と並んで如何に重要であったかを物語る傍証のひとつである。⁽²⁾

912年、リューリックの子イゴル（イゴーリ）を大公としてキエフ公国が成立、ビザンチン帝国の首都となっていたコンスタンチノーブルを二度にわたって脅かすほどの勢いを持った。しかし、ノブゴロドの一派はキエフから離れ、その結果として、ノブゴロドの保護下にありながらヴァイキングと通じて西方

- (2) 一般には中世は「農奴制の時代」として理解されているが、中世封建制時代においては奴隷も農奴とならなくてきわめて重要な社会的役割を持っていた。M. Block, *Slavery and Serfdom in the Middle Ages : Selected Essays*. (trans., W. R. Beer, University of California Press, 1975). O. Patterson, *Freedom : Freedom in the Making of Western Culture*. (Basic Books, 1991) 347—401, esp. 350—353. 中世東欧における奴隷貿易の重要性については、W. D. Phillips, Jr., *Slavery from Roman Times to the Early Transatlantic Trade*. (Manchester University Press, 1985), Part II. 中世後期の地中海を中心とした奴隷貿易については、布留川正博「15、6世紀ポルトガル王国における黒人奴隷制(1)：近代奴隷制の歴史的原像」(同志社大学『経済学論叢』第40巻第2号、1988), 57—68。

との毛皮取引を牛耳っていたゴトランド商人たちが勢力を失ってしまう。その影響は、バルト海経由のロシア産毛皮取引に係わる大変動に帰結し、12世紀のロシア～東ヨーロッパ世界の混乱へと結びつく。この混乱に乗じて抬頭するのが、北ドイツの商人たちである。それ故、ノブゴロド人が早くも1190年に、ゴトランドと並んで北ドイツ商人たちとの通商協約を結んだことは、その後の歴史の展開に鑑みて、実にタイムリーな賢明な選択であった。

ノブゴロドは、北ドイツの商人たちに対し、定期的に一定量の毛皮を販売した。そのための毛皮は、ノブゴロド支配下の耕作可能地に住んだスラヴ人やスラヴに同化した農耕少数民族が貢納する租税・罰金・地代などにより^{まかな}賄われた。また、ノルウェイ並びにスウェーデンのフロンティアから西シベリア一帯にかけて広がるロシア北方のノブゴロドの植民地からも、大量の毛皮資源が調達された。ノルウェイ人がラップ人に対して貢納賦課の正当性を主張したのにならない、ノブゴロド人はラップ人を含むロシア北方の全住民からの貢納徴発権を主張した。厳しい貢納を逃れて北上する少数民族を追撃し、ノヴゴロドたちは11世紀の後半までにはペチョラ河中流域に散住したペチョラ族にまで支配権を及ぼした。その1世紀後には、オビ河西方のイウグラ族もノヴゴロドにより貢納を取り立てられるに至った。この時点で、ノヴゴロドはユーラシアの北の果てにまで勢力圏を拡張した、ということになる。無論、この貢納の徴発は、重装備の武装軍団を送り込むことで達成されたものであり、小規模な軍団の場合には、少数民族からの激しい抵抗も示された。例えば1187年、100名足らずのノヴゴロド兵が貢納徴収のためにペチョラ族およびイウグラ族の集落に向けて派遣された際、ペチョラ・イウグラ側は大規模な反乱を企ててノヴゴロド兵を^{せん}殲滅した。間もなく、ノヴゴロドは北方諸民族をはじめさまざまな異民族からの侵攻を受け、またロシア北方の「^{ボヤール}大貴族」の反目など、数々の内憂にも悩まされはじめる。これら新興の貴族たちは、いずれも自分たちの領土内で独占的に毛皮取引の権益を確保しようと目論んでいた。また、ペチョラ族、イウグラ族からの貢納徴収権をめぐる、時には互いに^し熾烈な争いを演じた。ノヴゴロドとの妥協をはかるため、これら貴族はノヴゴロド向けの毛皮に通行税を課

すことで利益を蚕食^{さん}しようともした。ノヴゴロドと近隣有力層との毛皮をめぐる激しい争いは、14世紀の末まで絶えることなく続き、ウスティク、サズダルなど強力なライバルも現われた⁽³⁾。13世紀にはスウェーデンとノルウェイからの外患が、ノヴゴロドにとっての最大の危機となった。この時期のスウェーデンによるフィンランドの征服は、カレリア地方の支配とその地域の毛皮交易網を寸断し、バトル海交易と結びついたノヴゴロドの商権を著しく損なうものとなった。スウェーデンはカレリアやバトル海の商業を完全に掌握するには至らなかったものの、当時「アポ」と呼ばれたトルコ系商人とのフィンランド東部での毛皮交易権を手中に収めた。なお、キプチャク汗国の攻撃により大きな被害を受けたノヴゴロドは、続く世紀、モスクワ公国によって滅ぼされるに至る⁽⁴⁾。そのモスクワ商人の歴史は、本稿では第Ⅱ章3節での研究課題となる。

(3) こうした貴族は、元もとは奴隷商人、塩商人として出現した。M・H・ポクロフスキー『ロシア史』（岡田宗司監訳、頸草書房、1975）第1章。同書第8章には、モスクワとノヴゴロドの勢力争いの歴史が包括的にまとめられている。また、松本栄三「中世ノヴゴロドの階級闘争」（林基監修『階級闘争の歴史と理論』2、青木書店、1981）173—191。

(4) 以上「ロシア商人の起源」とノヴゴロドの毛皮史については、主に『ロシア原初年代記』（國本哲男・山口巖・中条直樹ほか訳、名古屋大学出版会、1987）。T. S. Noonan, "Furs, Fur Trade." (*Dictionary of the Middle Ages*, Charles Scribner's Sons, 1985) 327-329. G. Y. Lantzeff, "Russian Eastward Expansion before the Mongol Invasion," (*American Slavic and East European Review*, 6, 1947). *The Chronicle of Novgorod, 1016-1471*. (translated from the Russian by R. Michell and N. Forbes, AMS Press, 1914). R. Delort, *L'Histoire de la Fourrure de l'antiquité à nos jours*. (EDITA S. A., 1986), 105, 138.

3 ハンザ同盟の抬頭

以上に見てきたように、ノヴゴロドはスラヴ世界の雄としてロシア産の毛皮を長年にわたり支配してきた。そのノヴゴロドと北ドイツの新興商人との結びつきは、良質なロシア産毛皮が大量に西方ヨーロッパ世界へと流入しはじめる最大のきっかけを提供した。しかも十字軍以後、ヨーロッパ上流社会には、F・ブローデルのいう〈流行の狂気〉が着実に広まりつつあった。——こうした推

移の中でこそ、ハンザの抬頭が問題となる。

ドイツ語で「ハンザ」の原義は「群れ」ないしは「集団」を意味している。商業史上に有名な「ハンザ同盟」は、特に外国において貿易の特権を付与された商人同業組合（ギルド）を意味しており、「旅商組合」といった訳語で理解される集団である。その起源は、通常は12～13世紀と言われるが、すでに11世紀の内に、外国居住の法人的商人団（社団）のことをドイツでは「オスターリング」と呼び習わしていた。オスターリングの最大の目的は、バルト海経済の支配におかれていた。

1161年、ドイツ商人はバルト海中央に浮かぶゴトランド島のヴィスビーでヴィスビー・ハンザを結成、旧来の個別巡回商業を集団化し組織的に系列化する。このことにより、簿記・信用取引などを活用した文書取引が一般化し、遠隔地交易の大規模化と安定とが促進されたことは、商業史上きわめて重要である。13世紀初頭には、彼らはノヴゴロドの毛皮取引のひとつの中心であったセント・ピーターズヤード（現ペテルホフ）の町での取引特権を獲得、ロシア進出の拠点を確保した。これ以後250年間、ロシアの西方向けの毛皮交易は、独自の地位を保ったノヴゴロドとハンザ諸都市とによって支配されることになる。セント・ピーターズヤードでは「シェーラ」と呼ばれた成文法が制定され、取引や日常生活の厳格な統制が行われた。毛皮の取引は町の城塞内で行われ、ドイツ商人の結束は非常に固かった。この町のドイツの毛皮商には、「冬商人」と「夏商人」という二つのタイプがあった。厳しい冬に耐えて取引を敢行した「冬商人」は、上質の冬ものの毛皮を手に入れることができた。「夏商人」は厳しい気候を気づかう必要はなかったが、冬に比べると安物の毛皮しか得ることができなかった。

ハンザ商人たちは、セント・ピーターズヤードからだけでなく、ヨーロッパ東方の各地から莫大な数量の毛皮を買いつけた。中でもノヴゴロドへの陸路の要衝であったドルパット（現エストニア共和国タルトー）が最大級の取引拠点で、チュト湖を越えてプスコフの毛皮輸送と密接に結びついていた。フィンランド湾に面したリヴァル（現タリン）の町は、ハンザ商船がノヴゴロドとの取

引を行う上での重要な中継地点であった。13世紀初頭の内に、ドヴィナ河の河口に位置するリガ（現リトアニア共和国の首都）の町も栄えはじめた。このリガへは、上流のロシアの町ポロツクやヴィテプスクからばかりでなく、ドニエプル河上流のスモレンスクからも大量に毛皮が送られた。ちなみに、1229年にはハンザ商人とスモレンスクとの間で通商条約が締結され、ハンザ商館をスモレンスクに置くことが取り決められている。スモレンスクの毛皮、特に上質のリス皮の取引量は莫大なもので、この町に産したリス皮を意味する *smolyng* という言葉が遺されているほどである。リス皮が地名を冠して呼ばれたのは、そのリス皮を産地によって等級づける、という意味もあった。中央ロシアのクリアズマからのものは *clesmes*、リトアニアからのものは *letwerk*、ポーランド産のものは *polanewerk*、オネガ湖周辺から送られたものは *onige* とそれぞれ呼ばれた。 *russewerk* と通称された毛皮の産地は正確には知られていないが、その名の通り、恐らくは中央ロシアからのものと推定される。産地だけでなく、毛皮獣の捕獲時期や毛皮の特色によっても、細かな等級づけがあった。即ち、初夏に捕れた毛皮は *popel*、夏ものは *ruskyn*、秋ものは *strandling* と呼ばれた。また、北方からの冬ものの最高級品は *shonwerk*、それに次ぐ青味がかった灰の背と白い腹の毛皮が *grauwerk* であった。更に、北方産の冬場もので灰背のものは *gris*、その内白い腹の毛皮から得られるスキンは *vair*⁽¹⁾、北方冬場もので灰背・白い腹に灰のわき腹を持った獣から得られるのが *minever*、そのわき腹部を窃除したのが *pured minever* であった。このような等級づけ

(1) *vair* はフランス語で「銀ネズ色のリス皮」を意味し、発音上、ガラスを意味する *verre* に通じる。『ペロー童話集』で馴染みの深いシャルル・ペローは、シンデレラに「ガラス *verre* の靴」を履かせたが、シンデレラ物語（中国唐代の随筆集『酉陽雜俎』が起源と言われる）は、元もとは「リス皮 *vair* の靴を履く」という伝承であったと理解すべきである。なぜなら、中世フランスではリス皮は王侯の権力のシンボルとして紋章の装飾などに頻繁に用いられていたのであり、王子とダンスを踊るのであればガラスよりもリス皮の靴の方がふさわしいからである。従って、「シンデレラの靴をリス皮と考えるのは、一時信じられた古い説」とする岩波文庫版『ペロー童話集』の訳者解説は、単に新説を強調したものであって、正鵠を射てはいない。詳細については、いずれ別稿にて論じる予定である。

は、均質な仕立ての毛皮服をつくるために、どうしても必要なことであった。大量の均質な毛皮を扱う^{なめし}鞣皮職人たちは、そのために、きわめて複雑な毛皮の等級づけに誰もが精通したという。

1259年には遠隔地商業の拠点となるリューベック、ハンプルク（現在でもこの町の正式名は「自由ハンザ都市ハンプルク」である）、ヴィスマール、ロストックなどの間に通商協約が結ばれ、ケルンおよびヴェストファーレンの商人はロンドンでもハンザを結成する。そして14世紀半ばには、ドイツ商人は「ドイツ・ハンザ同盟」として大同団結するに至り、特定商品の販売規制をはじめとしてさまざまな協約や取引システムを整備した。

15世紀初頭に至ると、ロシア産毛皮を西方へ送るための新たな二つのルートが開拓された。まずは、セント・ピーターズヤードにあって長年抑圧されつづけてきたプロシア出身の商人たちが、西部ロシアの大部分を支配しはじめたリトアニア人と盛んに取引を行うようになった。そのため、ポーランドのマゾヴィアやポドリアと並び、ダンツィヒがリトアニアやロシアからの毛皮を西へと輸出する主役になりはじめた。くわえて第二に、主にニュルンベルク出身の南方ドイツの商人たちが、南ドイツとポーランドの交易をとり持つことにより、東西ヨーロッパを結ぶ内陸交易路をきり拓いた。この交易路の開拓により、ハンザの独占交易圏とは全く無関係に、直接ロシアや東ヨーロッパからの毛皮を得ることができるようになった。ただし、このルートは、ノヴゴロドやリガ、レヴァル、ダンツィヒなどによるバルト法沿いの海岸ルートほどの重要性を持つには至らなかった。

以上のような経緯の中で、13世紀から15世紀にかけてハンザ同盟は莫大な数量の毛皮をヨーロッパ世界へもたらした。正確な統計資料や輸出源についての文書は少ないが、断片的な史料からだけでも、ハンザの毛皮取引が如何に大規模であったかを推察することができる。例えば、1311年、プスコフの町ではドイツ商人のために5万枚の毛皮が集められた、との記録がある。1403年から1415年にかけて、ヒルデブラント・ヴェキンシュゼンとジーヴェルト・ヴェキンシュゼンは、兄弟でフランドースに向けて実に30万枚の毛皮を輸出したとき

れる。その内の約30%はレヴァルから、20%強はリガから、そして約50%はダンツィヒから積み出されたものであった。同時期、1405年に3隻の商船がリガに出帆し、ブルージュに向けて45万枚もの毛皮を積み出したが、これはドルバット並びにリガ在住の107名のハンザ商人が所有する船舶によるものであった。ハンザとノヴゴロドの取引が最も盛んだった頃には、毎年数百名に達するドイツ商人がセント・ピーターズヤードに居留したと推定されている。⁽²⁾以上の数値は、ハンザの毛皮取引を示したほんの断片にしか過ぎないが、「30万枚」「45万枚」といった値は、決して過大でも不正確でもない。むしろ控えめな推計を伝えたもの、という可能性も高い。というのは、例えば1384年には、わずか2ヶ月の内にロンドンに対してだけで37万7000枚ものリス皮が送られた、という史実もあったからである。このことに気づくならば、乱獲が究まった近代に先立って、中世社会でも信じがたいような勢いで毛皮獣が獲り尽くされたという史実を、ここで今一度確認しておくべきだろう。毛皮獣の激減ぶりが、「掠奪のシステム」に基づく「生態学的な危機」とさえ形容できることについては、本稿では以下の諸章でも何度か強調する予定である。そうした根底的な「危機」を生むような文化的、あるいは心理的な伝統が、一体どのような思想や「心性」を基礎としてつくり上げられてきたかは、大いに興味深い問題ではあるが、今は詳述の余裕はない。⁽³⁾ただ、毛皮取引の途方もない数量については奴隷貿易などのそれと同様、狭い島国に住む我われ日本人としては、なかなか実感として把握し難い面があり、さしあたり以下では項目を改めて、中世期の毛皮資源の枯渇の問題を一瞥しておく。

- (2) ハンザ同盟については、高村象平『ドイツ・ハンザの研究』（日本評論社、1959）をはじめ、関谷清『ドイツ・ハンザ史序説』比叡書房、1973）、高橋理『ハンザ同盟』（教育社、1980）など、参考文献が邦語でも数多い。ただし、その毛皮取引については、Ph. Dollinger, *La Hanse ; XII-XVIIIe siecles.* (Paris, 1964). Dollinger, *The German Hansa.* (Stanford University Press, 1970). Noonan, op. cit., 330. なお I・ウォーラーステインが、その代表的著作『近代世界システム』（邦訳岩波書店、前掲）において、ハンザと当時の「国際的債務奴隷制」との係わりについて論及していることは、筆者には頗る興味深い。同書邦訳（156—157頁）を是非とも参照された

い。ただし、本稿冒頭でコメントした通り、この「国際的債務奴隷制」と同等なシステムが20世紀に至るまで存続した史実にウォーラスティンは気づいてはいない。

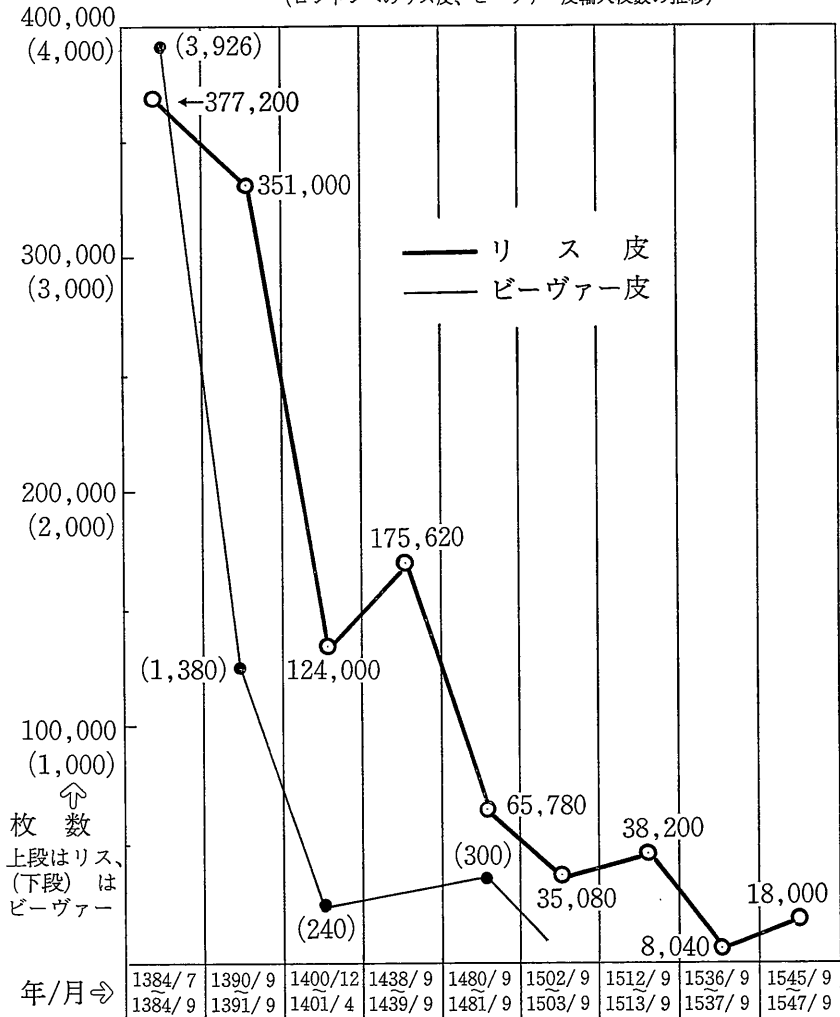
- (3) 示唆的な関連文献として、山下正男『動物と西欧思想』（中公新書、1974、172頁以下）および池上俊一『動物裁判：西欧中世・正義のコスモス』（講談社現代新書、1990、193頁以下）の2著作を挙げておく。

4 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇

ヴァイキングおよびノヴゴロド、ハンザ商人によって中世の北欧～ロシア（ヨーロッパ・ロシア）で毛皮の貢納圏が急速に拡大したことは、この地域に棲息する毛皮獣の急速な枯渇を導いた。後世の毛皮史の展開に照らして考えるまでもなく、「わずか2ヶ月でリス皮37万7000枚」という先に挙げた驚異的な数値は、記録に残されたほんの一例にしか過ぎないのであり、そのことの歴史の意味は、繰り返し問い直される必要がある。現在においては、木材の乱伐によって熱帯雨林で年に数千種もの種が絶滅^{しゆ}すると言われ、生態学的な危機 *ecological crisis* がグローバルな規模で進展しつつあることが世界的な関心を集めているが、森を殺し、そこに棲息する動物を無際限に捕獲するという仕組みの起源は、すでに中世初期の内に（あるいはもっと以前に）歴史の中に埋め込まれていたと認識しておくべきである。その「掠奪のシステム」が、国境や文化圏を越えて、しかも破滅的な危機を拡大しながら伝播したところに、歴史が抱え込んだ問題の深刻さがある。歴史は単に「進歩」したのではなく、技術の進歩や「世界システム」の拡張に伴って、かえって弊害は広まり、深まった面がある。

次図は、14世紀の末から16世紀半ばに至る期間の、ロンドンへの皮革類輸入の激減ぶりを指摘した E・M・ヴィールの挙げている数値を、リス皮とビーヴァー皮につきグラフ化したものである。リス皮もビーヴァー皮も、驚異的な勢いで急速に枯渇化するすんだ事情が推察できる。ヴィールの研究によると、中世の英国においては元々はリス皮の輸入が主流で、その他には *lettice*, *budge* といった動物の毛皮の輸入が大きな比重を占めていたというが、*lettice* も *budge* も、もはや絶滅したらしく、具体的にどのような毛皮獣であったかさえ

図 I-1 中世ヨーロッパにおける毛皮資源の枯渇：1384年～1547年
(ロンドンへのリス皮、ビーヴァー皮輸入枚数の推移)



E. M. Veale. *The English Fur Trade in the Later Middle Ages* (Oxford University Press, 1966, 158-159).より作成

わからない。中世初期のヨーロッパ、それに後年開拓される新大陸やシベリアで主役であったビーヴァー、テンなどは、16世紀以後のヨーロッパでは、きわめてわずかにしか取引されていない。これは、この時期には供給源たる北欧や東欧ですでに毛皮資源の枯渇が進展していたためである。新大陸やシベリアの広大な寒帯・亜寒帯での毛皮資源の開発は、一面においてはいわば中世ヨーロッパにおける乱獲の補填^{てん ほか}に外ならなかった。ヨーロッパ中世史とアメリカ史の研究者があまり交流を持たないわが国の研究状況にあっては、こうした史実はなかなか見えにくく、今後色いろな分野での比較や共同研究が待たれる。

それはともかく、図に示されたリスやビーヴァーの激減ぶりは、まさに異様⁽¹⁾と言うしかない。こうした異様な推移は、後に黒テンやラッコ、それにバッファローなど、近代世界で狩猟の対象となったありとあらゆる毛皮獣にも現われる。そしてその激減ぶりは、毛皮獣棲息地に先住した世界各地の少数民族の人口減にも、そっくりそのまま反映する。例えば、今から500年前のコロンブス到来時に100万ないし300万人以上居たと推定される北アメリカ先住民が、今から100年前の1890年には25万人（純血インディアンは7万5000人⁽²⁾）に激減してしまったことの歴史的な意味は、余りにも大きい。北米においては、後に本稿で詳しく論証するように、毛皮取引 Fur Trade は“Indian Trade”とも呼ばれて、当初インディアンとヨーロッパ人との間に比較的良好な人種関係を創り出した場合もあったが、結局はインディアン社会の完全な破壊に帰結することが多かった。中世のヨーロッパ世界に埋め込まれた「掠奪のシステム」は「そっくりそのまま」と表現してよいくらいにアメリカ社会に移植されたのであり、それが「新大陸」アメリカの歴史の展開に直接に関連がなかった、あるいは全く無縁であったと考えることは誤りであろう。その史実を裏づけるかのよ

(1) ヴィールは、リスやビーヴァー以外に、白テン、黒テン、テン、ミンク、ニオイネコ、オオヤマネコ、カワウソなどの枯渇についても一覧している。拙稿「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」（龍谷大学『社会科学研究所年報』第20号、1990）79.を見られたい。

(2) W. C. Mcleod, “Big Business and the North American Indian.” (*American Journal of Sociology*, vol. 34, no. 1 1928) 491.

うに、H・A・インニースやE・E・リッチなど、植民期アメリカの毛皮交易史に関して大著を著した歴史家たちは、いずれも中世以来の毛皮資源枯渇化の驚くべき進展と連続性について、驚嘆の声を挙げている。⁽³⁾ 世界市場向けの換金用商品を大土地保有と奴隷労働とによって生産した南北アメリカの近代奴隷制プランテーション社会が、ある面で「そっくりそのまま」中世の地中海世界の伝統の移植であったのと同様に、旧世界の「掠奪のシステム」は、新世界の毛皮交易の歴史の中に大きく影を落としていたのである。⁽⁴⁾

ともあれ、ロシア並びにヨーロッパ東方産の毛皮は、本章で見てきたように、途方もない数量を単位として、すでに9世紀の頃からヴァイキングの手を通じて続々とヨーロッパに送りはじめられていた。13世紀ないしはそれ以前から、ハンザ商人による大量取引もはじまった。毛皮・皮革の送り先はフランドルやイングランドなどをはじめとして、ヨーロッパ一円に及んでいた。リユーベック経由では、毛皮はイタリアの諸都市にまで送られた。1519年、レオナルド・ダヴィンチは遺言によって侍女マトゥリーナに毛皮を遺贈しているが、⁽⁵⁾ それも、ひょっとするとハンザ商人の手を経た商品であったかも知れない。スペイン、さらにはポルトガルもハンザの交易圏に含まれていた。黒テン、白テン、ビーヴァーなど最高級の毛皮は、timmer と呼ばれる40枚一組のパッケージ詰めにされ、リスや割安の毛皮は、250枚、500枚、1000枚単位で箱詰めにされた。

支配階級の毛皮に対する需要は、ヨーロッパ中どこにおいてもきわめて高かった。しかし、いずれの毛皮も余りにも高価であったために、市場は飽和状態に陥り、毛皮商人たちはしばしば販路に窮した。先に名を挙げたヴェキンシェン兄弟商会は、「15世紀初頭の内は、毛皮が全く売れなかった」と嘆息を書き残している。⁽⁶⁾

(3) H. A. Innis, *The Fur Trade in Canada : An Introduction to Canadian Economic History*. (University of Toronto Press, 1956) 5-6. E. E. Rich, *The Hudson's Bay Company, 1670-1870*. (McClelland and Stewart, 1960) 46.

(4) 池本幸三・布留川正博・下山晃『もうひとつの近代：大西洋システムと奴隷制プランテーション社会』（仮題、阿吽社、1994）第1章、第3章。

(5) L・レティ『知られざるレオナルド』（小野健一訳、岩波書店、1975）19。

なお、中世における毛皮資源の枯渇に係わっては、例えばビーヴァーなどはプリニウスの記述の影響から「魚類」の一種とみなされて「^{フィッシュ・デイ}魚食日」(断食・断肉期間)に大量に食されたらしいことや、中世人独特の動物観があったらしいこと、獣脂やジャコウなどへの需要が非常に高かったことなどにも思いを巡らせておく必要があるが、紙数の都合上、今はそれらについては論及を控える。

本章で扱ったハンザ衰退の原因については、1397年の「カルマル同盟」締結以後の北欧諸国の抬頭や⁽⁷⁾気候の大変動、北海・バルト海の漁業資源の枯渇、大西洋経済圏の興隆による商業ルートの変動など色いろな要因が専門の研究者の間で挙げられているが、15世紀に入ってから、ノヴゴロド周辺における毛皮資源の枯渇も大きな原因であったに違いない。折しも、この世紀の終りには、ロシアにおいてはじめて皇帝^{ツァー}の称号を用いたことで有名なモスクワ大公イワン3世がセント・ピーターズヤードを占領し、ハンザ商人たちを捕えて略奪のかぎりを尽くしていた。その後継者ワシリ3世は、1514年にこの町を再興せんと試みたものの、数かずの事情が重なり、遂にセント・ピーターズヤードは往時の栄光を取り戻すことはなかった。そして、ロシア産毛皮の主要な取引拠点は、広大なシベリアのフロンティアを背後に抱えたモスクワ公国へと移行したのである。シベリアの无尽蔵の資源の開発は、新大陸アメリカの「毛皮フロンティア」の開拓と共に毛皮の歴史に全く新たな局面をもたらすが、その展開を単にヨーロッパ史の枠組みの中で理解しようとすれば、史実の全体像を見誤ることになる。従って次には、次章で論じるように、シベリアを北辺とした「ユーラシア」世界への視点を持つことが、是非とも必要となってくる。

(6) ちなみに、同じ頃ヴェニスでは、毛皮価格はおよそ次のようであった。黒テンの生皮は8/10ダカット以上、白テンが3/10ダカット、ビーヴァーが12/10ないし14/10ダカット、オオヤマネコやカワウソ、イタチ類は大体その1/24、並のリス皮が白テンの1/10。R. Delort, *Le Commerce des Fourrures en Occident à la Fin du Moyen Age : vers 1300~vers 1450*. (Ecole Française de Rome, Palaise Farnèse, 1978) 330.

(7) さしあたり、I・アンデション/J・ヴェイブル『スウェーデンの歴史』(潮見憲三郎訳、文眞堂)。

15世紀ポー（フランス）の毛皮職人
（筆者所蔵の同市観光パンフレットより転載）

